

[巻頭言]

人間中心の情報システムは学際領域研究の推進から

青山学院大学社会情報学部 教授

宮川 裕之

■ はじめに

情報システム学会は創設 10 周年の節目が過ぎました。先日開催された 2018 年度第 1 回評議員会では、本学会のあるべき姿、現状、今後の展開などについて活発な議論が交わされ、情報システム学確立の大切さと難しさを改めて考えさせられました。

学会の使命は、知識創造活動の成果を、より普遍的な知的体系として積み上げていくために、新たに見いだされた知見を集め、蓄積し、伝達することで、知的成果の再生産を促すための支援を行うことです。その上で、人間中心の情報システムを目指す本学会のますますの発展を願いつつ、本学会の運営に関わらせていただいた、この 10 年間の経験も踏まえ、人間中心の情報システムを理念としている情報システム学会の今後の展開に関して 2 つの提案をしたいと思えます。

■ 学際領域の研究推進

人間活動を対象とした研究は、文学、心理学、経済学、経営学、教育学、法学、社会学、哲学、宗教学、言語学、人類学、歴史学等々、様々な研究領域において進められています。情報化の流れの中で、情報領域との融合研究の成果への期待はますます高まり、融合領域における研究活動が今まで以上に盛んに行われていくことは想像に難くありません。本学会の全国大会、研究会、論文応募などの学会の諸活動をとおして、情報と人文、社会科学との融合領域における研究活動を推進していくことは有意義と考えます。

既存の研究領域を情報の視点でつない

でいくということは、つきつめていけば学問体系そのものを情報の視点で再構築することにつながります。これは容易なことでは無いのは確かですが、人間中心の情報システムを理念とする情報システム学会がこの動きを支援して促進を働きかけることは情報システム学の特徴を示す活動と考えます。

■ 課題領域に関する情報の収集と活用

人間活動の中で起こっている問題・課題を収集して社会で共有するしくみを提供する、これが 2 つ目の提案です。ある視点からは問題であっても、別の視点からは問題に見えないことはよくあることです。1 つの問題を様々な考えを持っている人達が認識して解決に向けて議論することは知識創造の第一歩です。会員の企業人割合が高い情報システム学会の特徴を活かして、企業活動で抱えている問題や課題などを集めて公開することから始めても良いと思えますし、大学人の会員には、教育研究活動で抱えている課題や問題を提示してもらっても良いでしょう。そして、その対象を、市民生活も含めて広げていく。かつちりしたものだと出しづらいというのであれば気軽に書ける SNS のようなものであっても、問題・課題の状況を知る糸口にはなると思えます。もちろん、問題の収集に止まらず、その解決への学術的なアプローチにつないでいくために、これらの問題を、情報領域を含む多様な専門領域に関心を持っている人たちに届くような仕組みを提供することが、学際領域の研究活動を支援する観点からは、大切だと思えます。

著者略歴

宮川裕之 (みやがわ ひろゆき)
情報システム学会代議員・副会長,
青山学院大学社会情報学部教授